

---

# 錬金術師の日常

時流 幌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

錬金術師の日常

### 【Nコード】

N1411Q

### 【作者名】

時流 幌

### 【あらすじ】

20世紀末に発見された技術「錬金術」  
それを使う者達「錬金術師」を取り締まる機関「錬金術対策局」  
の凶悪犯を取り締まる部署「凶悪犯対策係」の係長鷹津とその部下達の物語。

戦闘は・・・少なめ？

因みに物語の雰囲気は、コロコロ変わります。

## 第1話「序章」(前書き)

まだまだ未熟の作品ですが、よろしければ最後まで  
よろしくお願いします。

雰囲気は、あらすじにも書いた通り変わらせる予定です。

## 第1話「序章」

俺は錬金術師だ。これでも。

錬金術は、20世紀末に……誰だっけ？

うん3日前までは覚えてたんだけども。

とにかく20世紀末に発見された技術で、それまではそんなものは無い、

とされていた。

一般的に錬金術師は、研究室でフラスコを振ったり、怪物と格闘というイメージがある。実際俺もそのような事を夢に見てこの業界に入った。

しかし。

現実とは違った。

俺は今、大量の書類と格闘している。

錬金術の世界に入った頃には、なんかこう…

怪物のようなものと戦うものかと思っていた。

確かに、錬金術で生み出された合成<sup>s.b</sup>獣

の対策に借り出されることもあるが、それも時たま。

いつもはこのように事務仕事ばかりだ。

こんなことをするために錬金術を学んだわけではない

「はー」ため息をついてみー

「係長！仕事してくださいよ！鷹津<sup>たかつ</sup>係長」

ーたけれど、現実に戻された。

机の上にはやっぱり紙の山。

そして目の前には、20代の筋肉質な若者。一応俺の部下だ。

「わかってるよ、ちょっと休んだだけだ。南雲<sup>なぐも</sup>」

この係「凶悪犯対策1係」は、男ばかり。

いくらフアンタジーのような技術が発見されても

流石にここまではフアンタジー化されないらしい。

フアンタジーで言えば、こういうところに美女が居るのは定石だが・

まあ凶悪犯対策係。しかも錬金術使用犯限定となればこの局の女性職員から

敬遠されても仕方がないが。

「頼みますよ今日も予定があるので、残業は勘弁です」

「急かされなくてもやるよ！」

彼の言う通り。うちの係ではもう3日連続残業が続いている。

まだ出来たばかりの錬金術対策局でも

残業日連続記録をぶっちぎりの更新中である。

これは実に不名誉なことだ。

午後5時

いつもならば局員全員帰宅の時間だが……

うちの係ではもちろんまだ仕事が続いていた。

「あゝこれで4日連続だゝ係長のせいだゝ」

さっきの彼がつまりは南雲が、頭を抱えながら愚痴をこぼした。

「――悪かった。」

素直に認めざるを得ないだろう。

3時間後、何とか明日になるのは避けることができた。

しかし、これで4日連続残業達成となってしまった。

実に不名誉である。

……これはまた人事課にどやされそうだ。

「じゃ！また明日！」

南雲が閃光のような速さでオフィスを出て行った。



## 第1話「序章」(後書き)

最後まで読んでくださってありがとうございます。  
感想などもよろしければお願いします。

第2話「銃撃」(前書き)



## 第2話「銃撃」

仕事は終わったので、寮に戻ることにした。

係長以上の管理職は、庁舎近くの寮で生活することになっている。

結婚すれば別だが。

とにかく、長かった仕事も終わった。やっと帰れるな〜そう思った時、

放送がかかった。

『業務連絡、業務連絡2級以上の公認錬金術師は、直ぐに第1会議室に集合してください。』

直、これは役職に関係ありません。繰り返します』

……思わなければ良かった。

仕事とあれば向かわなければならぬ。

こりゃ金曜ロードショー見れんかもな。あと1時間で始まるし。

しぶしぶ会議室へ廊下を駆け足で向かっていると、横から声がかけられた。

「よ！鷹津お前もか？」

同期の宇井だ。錬金術高等学院時代からの友人でもある。

「たりめーだ。俺は1級だからな」

そう俺は、1級公認錬金術師だ。こう見えても俺は結構のやり手だ。↑ここ重要

「ははは、俺も早く1級に昇格しないとな！」

そうこうしているうちに第1会議室に着いてしまった。

ここは、局員全員を収容できる巨大な会議室で、席は1階席と2

## 階席の2段

に設置されている。2階席があると言うことは、少なくとも建物2階分の高さがある、ということだろう。たとえるなら映画館が良く似ている。しかし大きさは全く違うが。噂によると対爆仕様の建築になっているとか。しかし今はそんなことは関係ない。

会議室に入ると、既にかんりの人数が集合していた。

そのほとんどが1階席に座っていた。仕事熱心なやつらだ。階段を上り、2階席に座った。もちろん宇井はその隣だ。

重い扉が閉まった。すると、それが合図だったように、

「諸君、夜分に申し訳ない。よく来てくれた

さて用件を言おうか……」

と会議場前方から声がした。声の主は細身の知的そうな男だった。さてあんな顔の職員が居たかな？

「用と言ってもたいしたことではない」

じゃ呼ぶなよ！！ああ俺の金曜ロードショーが！

「死ね」

その場に居るものが全員耳を疑った。

すると会議場の前方の巨大なデスクから

銃を持った男達が出てきた。

「やべー！！」

俺と宇井はとっさに伏せた。

他の者もそうしただろうが――

手遅れだった。

ブウウウウウウ・・・・

という奇怪な音をたてながら

銃は凶悪な弾を打ち出し続けた。

脇腹に鋭い痛みを感じた。

「大丈夫か！」

奇怪な音なる中で、宇井に訊いた。

「大丈夫だ…だが足を…」

宇井の足を一瞥すると、足というよりは腰の辺りから血が流れていた。

「お前は？」

「俺は——ッッ！」

痛みが急に訪れた。

脇腹を見やると、一直線に血が出ていた。

「脇腹だ——だが掠っただけだ。歩ける。」

その時、不意に音が止まると、銃弾の雨も止んだ。

「クソッということだ！これは……」

宇井は混乱のせいかな、事の異常性にしばらくしてから気付いたようだ。

俺もそうだったが。

「判らん。だが大変なことが起こっていることは事実だろう。」

下の様子を確認する余裕はなかったが、恐らく全滅だろう。

他の2階席の連中は生きているようだが、皆怪我を負っていた。

一体どうということだ？

何故局内に銃が？

そして何故俺達を撃った？

わからない事だらけだった。

## 第2話「銃撃」(後書き)

次回いよいよ錬金術を出そうと思います。

よろしければ感想なども  
お願いします

### 第3話「反撃」

「ふ、他愛もない」

と下の方から呟く様な声がした。奴らの誰かだろう。

「どうすんだよ」

「どうするもこうするも俺らと奴らの間に壁を作るしかねえな」

俺は腰のポーチからチョークを取り出した。

錬金術は、物質の種類を理解し、原子レベルで分解して、それを再構築することが肝である。

さらに対象物質へ円を書きその中に、直線や図形で構成される式を書き入れる

事によってエネルギーを術師が制御できるようして、そのエネルギーを

対象物質に集中させる事によって発動する。しかし、制約があり質量保存の法則が適用されるので、無から有を作り出すことは出来ない。又、

術の有効範囲は術師の力量によって異なる。

と言うことを学院時代に習ったが、今の自分にどの位の力量があるのかわからない。

「いけるか？お前」

宇井が聞いてきた。

「こんなに長い距離は無理だが、やつらを封じ込めるぐらいは・・・」

「よし。錬成反応に気を付けろよ」

錬成反応とは、錬成時に発生する光のことである。

術師が、錬成に使うエネルギーが余るときに発生するものだ。

ここはエネルギーを余らせないようにして……

俺は、ドン！と錬成陣に両手を乗せた。

すると奴らを囲むように鉄のドームがせり上がってきた。

声を上げる間も無く奴らを閉じ込めた。

「良くやったぜ！やっぱお前すげえ！」

「ヘッ照れるぜ！」

実は冷や汗ものだった。

距離が距離なので、狙いがずれるかもしれないからだ。

しかし、成功した。こういうときには、格好付けて見るのも良いもんだ。

「さて、これからどうする？」

俺は宇井に尋ねた。

「とりあえず、外に出るか」

廊下にて――

「そういや今日の金曜ロードショー何だっけな？」

ひとまず緊張のほぐれた俺は、宇井に訊いた。

最低限の警戒は解かったが。

「うーむ確か「魔女の宅配便」だったかな」

「宅急便な」

会議室は1階だったので、もう玄関に着こうか、という所だった。

「おい！」

と誰かの声がした。

「！」

「！」

直ぐに拳銃を構えた

制式装備品のP228だ。

一応警察職の公務員なので、拳銃は持っている。

「おいおい鍊金術は使わないのかよ」

何者かは聞いて来た。

「たりめーだお前が銃を構えてんのに、陣書く暇あるか」  
俺は答えた。

「おっとつとそれより知ってんだろ、エメラルド板の事はよ」  
エメラルド板？確か学院で聞いた気が・・・  
宇井が

「なんだそれは？」

と答えた

「とぼけんじゃねえ!!」

と突然声を荒げた。

「知ってんだぞお前らの―」

と言いかけた時、突然バタリと倒れた。

「おいどうしたんだ？」

宇井が注意深く触ってみても・・・

反応なし。

「死んでるぜ」

と瞳孔を確認した宇井が言っていた。

「いったい誰が……」

俺はそう呟いた。

その時

「私だ」

と突如横から声が耳に入った。

俺らは拳銃を構えて声の主を凝視した。

それは、良く見知った顔。

俺らが局長だった。

「どうやったんですか？」

俺は尋ねた。

「秘密だよ」

その表情は暗くて見えなかったが、確かにそう言った。

それから俺達は外へと出た。

南雲や他の部下達が居た。

しかし、警官隊や、マスコミなどの姿は一切なかった。

「係長！大変でしたね。局を出てから直ぐに連絡が来まして、駆けつけたらこんな感じだった。ということです」

南雲がそう言った。

「心配してくれてありがとう

やはり持つべきものは良き部下だな。」

「何言ってるんですか。おかげで約束がパアですよパア」

と彼は言ってから、はははと笑った。

痛みがまた、ぶり返してきた。

●●●

その頃鉄のドーム内

「どうすんだよ銃も駄目だろうし爆弾なんて使ったら自分等も！」

「どうすんですかリーダー？」

「・・・大丈夫だ。この大きさなら爆弾を使っても隅に固まれば被害はない」

”リーダー”と呼ばれた男はそう言った。

「そうだなそれしかない！」

配下の男二人は、暗闇での混乱や昂ぶった精神状態で、常識的な判断が下せなくなっていた。

「仕掛け終わったぜ」

「よし早くこっちに来い」

男達は隅に固まった。

先に居た”リーダー”はもちろん壁に近いほうだった。ドッカーン！！とかなりの音と衝撃が3人を貫いた。

いや3人という表現は間違っている。

1人だ。  
ひとり

「ばかどもめ」

生き残った”リーダー”は、そう吐き捨てた。



2体の遺体からは、血が出ていた。心臓から。

「お前らが怯えて暴れちゃ困るからな」

と言いながら、血で濡れた愛用のナイフを布で拭き、腰のホルダーにしまった。

そのナイフは、真っ黒で刃が片方だけについているナイフだった。そのナイフは、幾人もの血をすってきたナイフだった。

「次こそは絶対見つけてやるからな」

そう悔しそうに言ってから、彼は行く。

ドームの外の、自由な世界へと。

### 第3話「反撃」(後書き)

初めての錬金術描写。  
上手くいきましたかな？

## 第4話「検分」

同時刻チャットサイト「ついつと」にて

20..12-36..鯖

大ニュースです!!

20..12-46..ぞぬ

なになに？

20..12-50..たくあん

なんだよ

20..13-03..鯖

なんか今錬金術対策局とか言う建物の、近くに泊まってるんですが  
銃声見たいなのが聞こえます  
大事件ですよ！

20..13-15..ぞぬ

幻聴乙www

20..13-21..たくあん

釣りやめれ

20…13—32…定冠詞

ミリオタが

20…13—42…鯖

釣りじゃないですよ

本当ですよ！

20…13—58…ぞぬ

つーか本当だったら騒ぎになってるだろ  
不勉強が

● ● ●

翌日

局内の調査が行われた。極秘調査ではあるが。  
局長からの”大事件ではないだろう”との鶴の一声で、  
決まったらしい。犠牲者も出ているというのに。

第1会議室内

調査官が室内に入室して、最初に言われたことが、

「やりすぎですよ。」  
だった。

「大丈夫だ。鉄も出来る限り多くの鉄骨から取ったし。」

「・・・後で見てもらわないとなあ。」

呆れ半分不安半分の表情でそう返された。後から入って写真を撮  
っていた他の調査官も

一様に同じ表情を浮かべ、一瞬フラッシュが止まった。

「それにしてもこれは・・・」

と、鉄のドームを見た南雲が言った。

ドームの断面は外側に向かって破れている。

「でも、こんな狭いところじゃ中が大変なことになるだろ。」

俺はそう言って、闇に覆われたドーム内に目を凝らした。

案の定中には男が2人ひどい状態で見つかった。

「ひどいな。」

そういつて俺は遺体の前でしゃがみ、手を合わせ黙祷した。

調査官と南雲がそれに習い、黙祷した

「顔もわかりませんね

身分を証明するものも・・・」

調査官が遺体の懷に手を入れ中を検めようとした。

しかし爆発で服は消えた。従って懷も必然的に無いことになる。

結局この男達の素性は分からずじまいだった。



同刻

「まずいな・・・」

一人部屋で呟いている人物がいた。

” ついっと ” に話題を投下した少年だった。

彼は ” 鯖 ” というハンドルネームで活動しているのだが、

悪戯でジョークネタ（本人感覚）を投稿した。

すると強烈なバッシングが到来して、チャットルームが炎上したのだ。

「悪戯だったのによ・・・昨日からバッシングしてきやがる。」

これは相当ピンチだろう。ID制のサイトのため、

二度とハンドルネームを変えられないからだ。

「ごはんよ」

とキッチンの方から声がした。

少年は椅子から立ち上がりキッチンへ向かった。



同刻

” ついっと ” で局での銃撃の話題を見ている人物がいた。

「まずいな」

その人物はそれだけ呟くと、電話を取った。

「ああ私だ。事が露見したかもしれない

対処を頼む。」

そう言い終えると、電話を置いた。

それからパソコンの画面をスクロールした。

他の者の発言を見る限りでは銃撃は狂言だと受け取られているようだった。

「芽は摘み取っておかなければな」

そういつてパソコンの電源を落とした。

このとき、嘘つき少年の運命は確実に変わった。

#### 第4話「検分」(後書き)

よろしければ感想などお願いします

## 第5話「火種」(前書き)

遅れて申し訳ありません  
やっと更新できました。



## 第5話「火種」

その後。第1会議室

を後にした俺たちは、先の調査官と一緒に取調室へ向かっていた。

「全くとくに悪いことしてないのに……」

俺がそう呟くと、調査官は

「我慢してくださいよ。命令ですから」

といちいち返してきた

「珍しい人だね。仕事上の付き合いで今日が終わればもう会うこともない

相手の呟きに返すなんて」

「……そういう性格ですから」

と調査官は顔色を変えずに言った。

「あんたの名前は？」

「ふじした藤下ですよ。因みに所属は文科省。ほらこの局が所属してる省ですよ」

「文科省だったのか。あまり気にしてなかったな」

「忘れっぽいんですね」

「そだな」

というやり取りをしていると、エメラルド板がどうしたこうしたと言っていた男の死体があった場所にきた。

「そーいやこの死体の死因は分かったのか？」

「？ 死体などありませんでしたよここには。見つかったのは会議室の2つだけです」

どういうことだ？ 確かに何らかの手段で局長に殺された男がいたのだ。ここには。

立ち止まって考え込んでいると、調査官……否、佐藤が、  
「どうかしたんですか？」

と聞いてきた。

「――いやなんでもない」

「そうですか。」

ということとは、片付けられたということだろうか。

その時、胸ポケットに振動が。

どうやら携帯のようだ。

開いてみると、メールが1件着ていた。

f r o m .. 宇井

S u b .. 今日

本文…よ！元気してるか？

俺は今日取り調べが遅くまで続くみたいだ。

このメールも短い休憩時に書いている。

言いたいことはそれだけだ。じゃな。

だそうだ。

こりゃ俺のほうも取り調べ長く続きそうだな。

結局この日は予想通り取り調べは遅くまで続くのだった。

俺は悪いことしてないってのに・・・



その夜。藤下の部屋にて。

「さてと……」

佐藤はパソコンの電源を付けた。

しばらくして、パソコンが起動した。

それからあるサイトにアクセスした。

実はこの男。”ついつと”の管理者であった。

管理者IDにログインして、自分のマイページを見た。

このサイトはチャットが出来るだけでなく、SNSサイトとし

ての一面もあった。

送信メッセージは……ないか。

——たまには巡回しないとね

そう考えて、藤下はサイトを巡回した。

管理者である藤下は、規約違反をしているアカウントを

削除したりアク禁にすることもできる。

さらに管理者であるということは必然的に

そういうアカウントを見つけて、しかるべき対応をする義務が生じるわけだ。

「お！」

藤下は驚いた様子で声を上げた。

珍しく炎上しているルームがあった。覗いてみるとなんと隠匿されたはずの局内事件についての話題であった。

「ふーむ」

藤下は唸った。

——ともかく消しておかねば。そう思った藤下はルームを削除した。

——これでよし、と。

藤下は考えた。

しかし、

——何故ばれてるんだ？

デマがたまたま当たっただけかな？

うん！きつとそうだ！

と思えるわけもなかった。

——一応明日報告しとくか。

そう結論付け、他のページの巡回を始めた。

●●●

「お！」

学校から帰宅した少年は

変化に気づいた。

炎上していたチャットルームが消されたのだ。

―これで”鯖”を使えるな。

そう考えた少年は、

PCの電源をつけ、”ついつと”にログインした。

ログインするとメッセージボックスにたくさんのメッセージが届いていた。

たぶん中傷か悪口だろう。

そう件名で判断した少年は、ふつーに無視して、  
まとめてメッセージを削除した。

否、正確には削除しようとした。だろうか。

数々の悪口らしい件名の中に、1件だけ普段懇意にしている

”ろっきー”からのメッセージがあった。

件名は、”緊急1！”とあった。

―！”と”1”を間違えるとは・・・どんなことだ？

好奇と若干の不安が混ざった気持ちで開封してみるとそこには、

本文…おいおいやばいよ！！

こんなのが晒されてるよ！←←←

本当なのか？

と3行だけの本文とコピペらしき文章が下にあった。

22…57―21…鯖を訪ねて晒し人

鯖の情報晒しまーす。

名前…雨海<sup>ウカイ</sup> 鋼太<sup>コウタ</sup>

住所…東京都松沢町の南部

年齢…15歳

それを見た瞬間、若干だったはずの不安が少年の心を支配した。  
やがてそれは恐怖に進化を遂げた。

少年にとってそれは、死の宣告と等しいものだったのだ。

## 第5話「火種」(後書き)

感想・評価

お待ちしております。

## 第6話「緘口」(前書き)

遅れましたが、この物語に出てくる人名・地名・団体名等の固有名詞は、

実在しません。又、事件・自己も架空のものです。

## 第6話「緘口」

「なんてこった……」

そこに書かれていた情報は、確かに正しかった。

少年は冷や汗をかきながらすぐにメッセージを返信した。

本文…そりゃーガセだわ

それからマイページをすぐに確認すると、コメント欄に”終了のお知らせ”だの”殺害予告”

と銘打たれたコメントが溢れていた。

すぐに、”情報編集”のページを開き、”自己紹介編集”をクリックした。

そこに、今流れている情報はガセであることを載せた。

―これで治まってくればな…

今や冷や汗をかき続けている少年は、そう思った。



取り調べが終わった後。俺は、なぜか局長室にいた。

というのも終わった直後放送で呼び出しがかかったからだ。

同時に宇井も。

局長室は、豪華な装飾はなく、おおよそ事務作業に必要なものしかなかった。

椅子に座った局長がおもむろに口を開いた。

「今日呼び出したのは他でもない―」

「…」「…」

「昨夜のことは内密にしてくれないか。まあ俗に言う緘口令という



やつだ。

：守ってくれるね？」

昨夜の事とは、謎の方法によって制圧、否殺されたあの男のことだろう。

「昨夜ではないですよ」

自分の手の腕時計を指しながら俺はそう囁み付いた。

局長は、壁に掛けてある時計をちらりと確認すると、

「そうだったね。もう12時過ぎてたよ」

皮肉は通じなかったようだ。

それから局長は椅子から立ち上がり宇井の傍により肩を叩いてからこう釘を刺した。

「特に君は守らねばならない筈だが」

そう言われた宇井の顔には、驚きと不安が浮かんでいた。

それから、肩から手を放して椅子に座りなおして、

「もちろん、このことを守ってくれば危害を加えん」

その言葉は、俺と宇井どちらに対してか分からなかった。

「もう行ってよろしい」

それだけ言うと、ドアが勝手に開いた。

：と思ったが外側に人がいた。

恐らく局長の手下だろう。

部屋から出ると、その手下は、こちらの顔を見ないうちにさっさと部屋に入ってしまった。

部屋から出ても相変わらず宇井の顔には、不安が浮かんでいた。

それから一言も話さぬうちに宇井は自分の部屋に、俺は寮に帰って行った。

寮への道で俺は、これからやって来るであろう不穏な未来を感じていた。



同刻。某ネットカフェにて。

検索ランキングでは決して目立ったサイトではないチャットサイトへ

ログインしている者がいた。

画面には、一見何の変哲のないやり取りが表示されていたが――  
暗号の専門家が精査すれば、性質の大きく違うやり取りが見て取れただろう。

ログインしている者の恰好と体格は決して目立たない。ありふれたものだった。

しかし、その殺意に満ちた目だけは、独特だった。

「あきらめたわけではないからな――かみじょう神定」

呟きは、周りの壁に遮られ誰にも聞こえなかった。  
その者の腰には黒く妖しく光るナイフがあった。

## 第6話「緘口」(後書き)

評価・感想をお願いいたします!!

## 第7話「休息」(前書き)

いままでで最大の遅れでした。

申し訳ありません。

確かこの前も、このようなことを言っていたような気がします。

「誰ももうお前の話は見てねーよ」

と思われる方もいらっしゃると思いますが、

これからも遅れる場合があるかもしれません。

しかし、どうか暖かい視線で見守っていただけないでしょうか。

これからも、未熟な私ですが、これからもよろしくお願いします。

## 第7話「休息」

翌日のことだった。

「うゝ」

俺は唸りながら起きた。

枕の隣においてある腕時計を見ると、もう10時だった。一瞬ハツとなり、思わず立ち上がってしまったが

今日は日曜日であつたことを思い出して、ほっとした。

——最近は色々なことがあつたからな——

そう思った。いつもは日曜日のことなど忘れないのに……とにかく、せつかくの休みだ。何かしなければ——

しかし、兎にも角にも飯だ。

置いてあるカップヌードルのビニールを乱暴に破り捨て、ポットからお湯を入れ……

——っておい！ 朝飯にカップヌードルかよ！

一瞬そう考えて湯を注ぐのを辞めたが、現在の時刻を思い出して——まあそれもいいか。

そう判断して、また湯を注ぎ始めた。

線の部分まで湯が入り、ふたを閉める。

3分待つ。

その間に、いつものようにテレビを見ることにした。

朝飯のときには、テレビを見ながら食う習慣がついてしまったからだ。

テレビをつけると、この時間帯らしく、半分討論が混じったようなニュースをやっていた。

議題は、

『増える錬金術師！その危険性とは』  
だった。

俺は内心笑ってしまった。錬金術師のどこら辺が危険なのか、と。しかし、テレビ番組は昔から大言壮語の癖があったことを思い出し、見続けることにした。

コメンテーターらしき人物が、

『政府はね、積極的に錬金術研究を推し進めるようですがね  
錬金術の力量は、才能の多寡によるところが多いんですよ  
はつきり言いますけどね。多くの人は、そこまで上達はできません。』

それなのに、錬金術の研究を進めるということは、これから益々錬金術師の持つ役割は大きくなるということですよ。

つまり、先天的な才能のあるものとないもので大きな格差が出来てしまうということですね』

そう言い終えると、女性キャスターは、

『そうですか……ということは、ますます人々の間で格差が広がってしまうということですね』

と返すと、コメンテーターは、

『それもあります、今回問題視していることは違います』  
と言った。

『それはなんですか？』

コメンテーターは、得意満面といった表情で、

『それはですね、錬金術自体が使い方によっては、非常に効果的な兵器となり得る技術のため、錬金術師たちを、どのように監督するのかということですよ』

もし、手練れの錬金術師が一人何らかの犯罪を行ったとして、その一人を

制圧するためには、自衛隊の2個小隊……80人分の強さはあるとされています』

『80人分ですか、ということは組織だって犯罪を犯した場合は』

『その場合は、大変な人数を動員する必要があるでしょう。最悪の事態です』

コメンテーターがそう言い終えると

『そうですか、政府はきちんと錬金術師の監督をしてもらいたいですね。』

さて次のニュースは――』

ばかばかしい。それがここまで聞いた中での感想だった。

まず”一人の術師を制圧するのに80人の人員が必要”という試算は、待ち伏せした時のことを前提とした試算で、

実際には、錬成陣を書く手間や、その場所の地面や壁の構成物質を調べる手間がかかる。

幸いにして、局内は構成物質が統一されているため、戦いやすいが屋外だとそうはいかないだろう。

実際には俺たちのような警察職に就くものを別とすれば一個班でも制圧できるだろう。

このような荒唐無稽な話が公共の電波、しかも真実を伝えるべきニュースでのせられるということは、

報道関係者がよほどの馬鹿なのか……しかしそれもあるだろうが、やはり視聴者……つまりは民衆の術師に対する警戒心からだろう。

最近確立された技術で、しかも今までファンタジーの中でしか登場しない技術だったのだから、

”得体のしれない不気味な技術”とされるのも当然の流れ。

そしてそれに拍車をかけたのが、黎明期に頻発したいわゆる”錬金術事故”だった。

得体のしれない技術で、しかも多くの死亡事故が発生したとなると人々が不気味がるのも無理はない。

また、それ故に錬金術を扱う術師達は、奇異な視線で人々に見られてしまうのだろう。

――まあ、別にいいけどな……

自分でもその考えは、自分の中の何かから目をそむけているものだとは感じていた。

だが、深くは考えなかった。  
「あっ」  
カップヌードルは伸びていた。



第7話「休息」  
(後書き)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1411q/>

---

錬金術師の日常

2011年5月17日03時44分発行